

古文学習のポイント

「古典文法講座」の開始に先立ち、今回は「古文学習のポイント」を簡単に説明しておきます。

「古文の勉強は難しい」と思っている人も多いと思います。確かに、高校で勉強する古文は決して易しくはありません。しかし、ポイントを押さえて学習していけば、確実に読解できるようになります。そのポイントは、まずは3つ、「古単語」「古典文法」「古典常識」です。順番に説明していきます。

I 「古単語」をマスターする

読解の上で、キーとなるのが古単語の知識です。古単語は、意味の核を押さえて覚えていくと、忘れません。例えば、「はかなし」という形容詞では、「はか」が「目印」という意味を持っています。なので「はかなし」は「目印がない」だから「①頼りない」という意味になるのです。そして「頼りない」ものは「②つまらない、とるにたりない」でしょうし、「つまらない」ものは「③ちょっとした」ものだ、というように押さえておくと、忘れないでしょう。また、「はかばかし」は、「目印が二つもある」というところから、「①はっきりしている」という意味になり、はっきりしている人や事は「②しっかりしている」と、意味が派生してくるのです。このように同じ「核」を持っている古語は併せて押さえておくといいでしょう。

さて、一方で、現代語をヒントに意味を捉える、という方法もあります。例えば「むつかし」という形容詞ですが、これについては現代語に「むずがる」という言葉が残っています。「赤ちゃんがむずがる」とは、「赤ちゃんが不快がっている」ということ。そこから、「むつかし」は「不快だ」という意味になることが押さえられるのです。なお、この場合に注意しなければならないのは、「むつかし」が現代語の「むずかしい」と違う意味だということです。現代語と意味が違っている古単語は要注意。しっかり押さえましょう。

ここで記した「意味の核」については、古語辞典や古単語集に記されていることが多いので、その部分に赤線を引くなどして勉強していくと、知識がしっかりと定着していきます。また、類義語や対義語なども記されていることがあるので、それを整理して覚えていくと、古語の知識は飛躍的に伸びていきます。古単語は300～400語ほど覚えておくと、古文を読むのに苦勞しなくなります。英単語に比べれば、はるかに少ない数です。効率的に覚えていきましょう。

なお、古単語は、できれば「文」の中で確認しておきたいものです。古単語集や辞書には必ず例文が載っていますから、ぜひ確認するようにしてください。

II 「古典文法」をマスターする

文法がわからないと読めない部分が古文には出てくると思います。主として、助動詞、助詞、呼応の副詞、敬語などでしょう。また、入試では文法問題がほぼ確実に出題されると言っていいいでしょう。なので、文法はまず、簡潔かつわかりやすく整理したシート(もしくはカード)を作っておき、折に触れて参照するようにしてください。なお、入試でよ

く見かける品詞分析問題は、述語部分が問われることが多い傾向にあります。その場合は、「どこまでが用言か」という視点で見ると、間違えにくくなります。

なお、古典文法については、次回からホームページで解説していきます。

Ⅲ 「古典常識」を身につける

古文読解では、古典常識が身につけていないと、見当がつかないということが時々あります。月の異名や十二支と方角・時間の関係、古代の国名などは基本ですから確認しておきましょう。また、平安貴族の暮らしや習慣などといったものも、知識があると読解がしやすくなります。このようなことについては、国語便覧を活用したり、参考書を参照したりして、一つ一つ身につけていってください。

さて、当面身につけてほしい内容は上記Ⅰ～Ⅲで、そのうちⅡについては次回からホームページに掲載していきますが、さらにその先、「古文読解のテクニック」も以下に記しておきます。余裕のある人は参照してください。

1. 古文を読むにあたって（1） 「主語を確定する」

古文読解のテクニックとして第一にあげられるのが、「主語を確定する」ということです。日本語は主語が省略される傾向にある言語ですが、古文ではその傾向が顕著です。うっかりすると、「これはいったい誰のことだ」ということになりかねません。そこで、古文を読む上では、しっかり主語を把握しながら読むようにしてください。なお、主語がわからなくなった場合には、①敬語から主語を類推する、②接続助詞をヒントにして主語を考える、といった方法があります。このことについては、後日、具体的に解説します。

2. 古文を読むにあたって（2） 「直訳する」

古文読解テクニックの第二は、「直訳する」ということです。文意がとれている間は、古文のまま読んでいけばいいでしょう。しかし、「何を言っているのかわからない」という箇所が、古文では、よく出てきます。そのときには、一語一語直訳してください。そしてその直訳と文脈から、文意を考えていくのです。こうすることが難文解釈の一番の近道ですので、覚えておいてください。

3. 古文を読むにあたって（3） 「敬語に精通する」

古文では、敬語が頻出します。そしてこの敬語は、1に記したように主語確定における重要なアイテムなのですが、それだけでなく、人物関係を把握する上でも重要なものなのです。もちろん、入試でもしばしば出題されます。それだけに、しっかり習熟しておく必要があります。「敬語はむずかしい」と思っている人、決してそんなことはありません。古文の敬語はとても法則性が強いので、覚えておくべきことをしっかりと覚えておけば、あとは方程式を解くように正解にたどり着くことができます。このことについては、「古典文法講座」で解説します。

4. 古文を読むにあたって（4） 「和歌に慣れる」

あえて「慣れる」としました。和歌は、しばしば古文の中に登場し、そして重要な役割を果たすことが多いのです。しかし、三十一文字という、きわめて短い表現のため、省略や飛躍が多く、現代人にはわかりにくい部分があるのも事実です。また、和歌には多様な修辞法があるため、その知識も読解に必要となります。ただ、一方で、和歌はかなりワンパターンな性格の短詩です。同じようなパターンで出ること多いので、慣れておくと、読解がかなり楽になります。一番いいのは、「百人一首」を読み込んでおくこと。ベストのテキストです。

5. 読解のサポート (1) 「ジャンルの知識を活用する」

古文には大きく分けて、「物語」「説話」「日記・紀行」「随筆」「評論」というジャンルがあります。ジャンルごとに性格がありますから、その知識を活用すると読解が楽になります。以下、各ジャンルについて概括しておきましょう。

(1) 「物語」

「作り物語」「歌物語」「歴史物語」「軍記物語」に大別されますが、主流は「作り物語」です。ほとんどが長編のフィクションで、登場人物が多数出てきます。人物確定、ストーリー追跡、心情把握の手順で読解します。「歌物語」は、和歌の詞書きが物語化したもので、短編が多く、和歌の背景把握と和歌の解釈が中心となります。「歴史物語」は「作り物語」に近いのですが、違いは登場人物が実在の人物であること。内容は歴史のエピソードであり、読解手順は「作り物語」とほぼ同じです。「軍記物語」は戦に取材した物語で、ほとんどが源平の争乱以降のもの。取り上げる題材が個性的で、その点に注意が必要ですが、読解手順は「作り物語」とほぼ同じです。

(2) 「説話」

神話・伝説・昔話・民話など、口承で伝えられたものを記録したもので、「仏教説話」と「世俗説話」に大別されます。説話は、もともとは「仏教説話」として誕生し(『日本霊異記』)、それが後に世間話のようなものにまでも包含するようになって「世俗説話」が誕生しました。比較的短編が多く、文体も平易で読みやすいものが多いのが特長です。ストーリー展開に興味の中心があることと、多くの場合、一つのテーマについて語られる傾向があるので、ストーリー展開とテーマを併せて確認していきます。

(3) 「日記・紀行」

「日記」は、日本独自の文学ジャンルで、江戸時代に至るまで書かれ続けます。基本的に一人称の主人公(つまり作者)の目から見た世界が描かれ、そこに作者の心情が語られるパターンになります。一人称の主人公は、主語として登場しないのが一般的ですから、文章ではそれを補って読むこととなります。また、作者の「思い」が綴られるため、主観的な表現が多くなります。「心情理解」が読解のコツです。なお、「紀行」は、旅の日記と考えてよく、情景描写の比重が上がります。

(4) 「随筆」

「随筆」は、作者の関心事について、作者の考えや評価を記したものです。「日記」が身の回りの出来事に関する心情を中心とするのに対して、「随筆」は関心の幅が広く、また、理知的、あるいは思想的な記述となっています。読解においては、「何を」

「どう考え」「どう評価しているか」の観点で追跡します。

(5) 評論

ほとんどが「歌論」ですが、後に「能楽論」「俳論」や国学の著作等が現れます。基本的に題材となっているものの批評が中心ですので、「題材は何で」「どういう基準で」「どう批評しているか」の観点で追跡します。

以上、ジャンルについて概括しておきました。読解の参考にしてください。

6. 読解のサポート (2) 「文学史の知識を活用する」

文学史の知識があると、古文の読解上、大きなサポートとなります。文学史は「大地図」「中地図」「小地図」にわけて押さえておくとよいでしょう。

「大地図」…上代、中古、中世、近世の大まかな文学の流れ。主としてジャンルに着目する。

「中地図」…各期間ごとのジャンル別の流れ。主として作品群に着目する。

「小地図」…各作品の概要と特徴。

このような形で文学史を整理しておくことで、作品名からかなりの情報を獲得することができます。古文の読解上、とても有利です。なお、「大地図」については簡略なものをpdfファイルで添付しておきますので参照してください。ただし、この「大地図」には韻文の流れは記していない（スペースの関係で書き込めませんでした）ので、その点を補ってください。

【おわりに】

古文は読みにくくて苦手だ、と思っている人もいます。実は、それはもっともなことでもあるのです。読みにくさの秘密、それは次の点にあります。古文の文章は、飛躍、省略、反復、脱線がけっこうある。それで読みにくいのです。ところで、これは、何かの特徴と一致してはいないでしょうか。そう、これは「話し言葉」の特徴です。実は古文は、「話し言葉」のように書かれた文章なのです（そして、それには訳があるのですが、ここでは割愛します）。そのことを頭に置いて、上記の事項を活用して古文を読んでいくと、古文が読めるようになります。

このあと、「古典文法講座」で文法は解説していきます。「古文単語」については各自で主体的に学習を進めてください。「古典常識」と「読解」は、教科書や参考書等を活用して、できる範囲で取り組んでみてください。

がんばろう、東高！